

# 講師 高山 義浩 先生



YOSUKE  
山口県健康福祉部  
審議監  
喜多 洋輔

基調講演の冒頭で高山先生がお話されたシステム(普遍性)↔カルチャー(個別性)の比喩が強烈な印象だった。参加者がいっせいに話に引き寄せられているのを感じた。高山先生とは学生時代にイラクの医学生との交流に誘われて以来のつきあいになるが、紛争、難民、新型インフルエンザ、地域医療構想、薬剤耐性問題などテーマは変われど、システムからカルチャーまで異なるレベルの視座を包括的に持ち縦横に語るその世界観に魅了され続けてきた。今回、高山先生が学生時代を過ごした山口県で先生の「地域包括ケア」観を多くの皆様と共有できる機会を持って、幸運だった。関係者のみなさまに感謝申し上げたい。



日本イラク  
医学生会議メンバーで。  
1998年8月ヨルダンの  
首都アンマンにて  
平成30年7月6日付  
高山先生の  
Facebookより転載

## KEYNOTE SPEECH

基調  
講演

### 在宅医療と介護の円滑な連携に向けて ～沖縄県の現状と課題から～

〈以下、平成30年7月6日付 高山先生のFacebookより転載〉

喜多くんと久しぶりの再会。ぜんぜん変わらない。でも、偉くなっとるらしい。それを感じさせない謙虚な語り口は相変わらず。私の〇〇な語り口も変わってないはず…。それを再確認しました^^; 今日私の講演で座長をしてくれました。隔世の感あり…。基礎自治体の行政関係者が多かったので、こんな話をしました。

たとえば、患者会や老人会などの意見を聞くのは大切です。でも、当事者からだけ課題を聴取していると、どうしても話が「質の向上」となりがちで、それに応えることへ行政担当者は没頭するようになってしまいます。もちろん、それも大切なんですが、いまの自治体行政に問われているのは、将来への備えである「量の確保」に取り組んでいるかどうかだと思えます。量を確保するというのは、必要となる病床を整備しましょう、介護施設を建てましょう、医療や介護の労働力を誘導しましょう…ということだけではなく、いまあるリソースを適正化し、有効に活用する仕組みを作ってゆくこと…さら

には、生活習慣病の予防、フレイル(虚弱)の予防、そして終末期(老衰)の支援などにより、量を「コントロール」することでもあります。施策を検討にあたって活用したいのは、地域で開催されている多職種研修会でのグループワークです。地域の課題について事例を交えながらディスカッションすることにより、それぞれの職域からみた側面に配慮しつつ、地域をより良くするための解決策が見出されるかもしれません。ただ、こうした研修会に参加してくるのは熱意ある人たちですね。よって、提示される施策もホットな、つまり労力を厭わぬ方向に偏りがちであることは理解しておく必要があります。課題を多く抱えているのは、むしろ研修会に来ない方々です。地域連携を推進するうえでは、グループワークで提案された施策を、ホットでない人たちでも参加できるように「いかにクールダウンできるか」にかかっているでしょう。そして、検討している施策について、別の組織や部署ですでに実施されていないかを必ず確認すること。まさに縦割りの弊害ですが、「市町村で施策を打ち出したら、すでに県が医師会に委託していた」といったことは、とくに在宅医療関係ではよくみられます。残念なことに、予算措置してしまうと撤回できないため、現場が似たような施策の板挟みになってい

高山先生が講演された内容をご覧になりたい方は右記QRコードを読み取ってください

<https://drive.google.com/file/d/15Gv1Jdk7xyBX-tH5bg9yq5hD7XQRyfKS/view?usp=sharing>



も、地域内で偏りが出てきていないか、あるいは一部に利用できない高齢者が出ていないか、自己負担が原因で貧困層がはじかれていないかといった公平性にも注意する必要があります。あと、お金や人をつぎ込めば改善するのは当たり前で、その予算や人員に対する成果として妥当かどうかも注目してください。そのあたりの指標が改善しない限り、いつまでたっても公的資金を突っ込んでしか地域包括ケアが維持できないことになってしまいます。できる限り民間移行させていく意識が必要です。

## TAKAYAMA PROFILE

沖縄県立中部病院 感染症内科・地域ケア科医長  
日本医師会総合政策研究機構 非常勤研究員

福岡県生まれ。東京大学医学部保健学科卒業後、フリーライターとして世界の貧困と紛争をテーマに取材を重ねる。山口大学医学部医学科卒業後、国立病院九州医療センター、九州大学病院、佐久総合病院などを経て、2008年より厚生労働省健康局結核感染症課、2014年より同医政局地域医療計画課。現在は、沖縄県立中部病院において感染症診療と院内感染対策に従事している。また、地域ケア科を立ち上げ、主として悪性腫瘍患者の在宅緩和ケアに取り組んでいる。著書として、『アジアスケッチ 目撃される文明・宗教・民族』(白馬社、2001年)、『ホワイトボックス 病院医療の現場から』(産経新聞出版、2008年)、『地域医療と暮らしのゆくえ 超高齢社会をともし生きる』(医学書院、2016年)など多数。